

法華経…その思想と価値

カルロス・ルビオ

※本稿は2012年2月17日、「法華経——平和と共生のメッセージ」展のアドリッド展開催を記念して、スペインSGIのスペイン文化会館で行われた講演をまとめたものです。

「蓮華」——それは泥沼に生じながら汚れなく開花する精妙なる美の模範です。この蓮華の名を与えられた聖典こそ「仏教経典の王（経王）」すなわち法華経です。法華経とはサンスクリットの経典「サダルマ・プンダリーカ・ストトラ」の漢訳経の名称としてつとに知られ、逐語訳的には「妙法・蓮華・経」となります。こ

の経は、仏教経典の中でも最も多くの注釈がなされており、何世紀にもわたって極東の国々に影響を与えてきました。今日でも中国、韓国、日本その他の東アジア諸国の仏教徒の深い崇拜の対象となっています。

「宇宙をスクリーンとした映画」のざっくり

法華経はあたかも、壮大な規模で多次元に展開される映画のようです。しかし、それを鑑賞するには、映画館の入口で渡される（3D映画のための）専用眼鏡などは必要ありません。ただ素直な心があればよいのです。

法華經に描かれる出来事は、計算できないほどの時間的長ささと宇宙的広がりの世界で起こります。ここには古代インドの宇宙生成論が、多くの面で反映されています。

仏教用語の「十界」「十法界」とは、一切衆生を十のカテゴリに分類したのですが、十界の一つ一つを判別することが重要です。なぜなら私たちが法華經の展開を目で追う巨大なスクリーンには、各界の住人の説明が続き、彼らはその境界ごとに一群となつて（妙法を聴いて）歓喜し躍動しているからです。

私たちの世界は、空間的には三次元の世界であり、あるいは四次元の世界かもしれません。しかし法華經の究極の精神世界は、もつと多次元の映画のようであり、しかも、すべての次元が途方もなく大きく、全宇宙をスクリーンとして映し出されるのです。

この金曜日の午後、わざわざお越しくださった皆さま方が、この巨大な映画の巨大なスクリーンを前に、しっかりと目を開いていかれるよう、ご案内したいと思います。ただし、映画とはいつでも、信仰の贈り物

を受け取られている皆さまにとつては、ご自身が出演者であり登場人物なのです。それにしても私はなんと大胆で非礼なのでしょう！ この信仰をしていないのに、皆さまにこの映画について語ろうというのですから。私こそ、この映画を「吹き替え版」か「字幕付き」で何度も観るべき人間なのです。それに比べて、皆さまはこの映画の重要な登場人物なのです。どうか私のあつかましさをお許しください。

では、映画・法華經の内容とは？ つたなくはありますが、それを説明するのが、今日のお話の目的です。

法華經の歴史と構成

法華經は、万人救済のメッセージと、描かれたイメージの美しさの特徴とし、仏教の複雑な歴史の中でも最終的な教えとされています。それだけに、法華經にはそれ以前のさまざまな傾向性が流れ込んでいます。

はじめは北部インドの言語で書かれましたが、紀元前1世紀か2世紀頃までに、サンスクリットで編纂され、それによって經典の価値は広く称揚され流布され

ました。サンスクリットから訳された漢訳経典の日付によって、西暦255年には成文化された経文が確実に存在したとされています。全部で6種の漢訳版があったようで、そのうち3種は失われています。保存された3種（『正法華経』『妙法蓮華経』『添品妙法蓮華経』のうち、西暦406年に鳩摩羅什によって漢訳された『妙法蓮華経』が中国では最も流布し、中国文化の影響を受けた国々にも大いに流布していきました。鳩摩羅什の漢訳は、文体においても内容においても最も豊かで優れていることを、だれもが認めてきました。スペイン語版の法華経も、鳩摩羅什の漢訳版を基礎にしています。

鳩摩羅什の漢訳作業では、多くの弟子が補佐し、弟子たちと意見を交換しつつ作業は進められました。チームを組んでの作業の中で、経文への注釈が書き出され、それらが分類され特徴づけられました。『妙法蓮華経疏』は鳩摩羅什の弟子の一人・竺道生（355〜434年）によって書かれ、注釈の編纂の中で最も古いものです。ここでは、第14章（安樂行品）と第15章（從地涌出品）の

間で経が二分割され、前半を「因」に関するもの、後半を「果」に関するものとしています。この分け方は今日までの伝統となっています。天台宗の実質的開祖である天台（智顛）も、これを尊重し、前半を（根源の仏が垂迹して）跡を残した部分（迹門）ないし理論的教えの部分とし、後半を根源の部分（本門）ないし肝要な教えの部分と決めました。そして、前半は、第2章（方便品）を中心とし、妙法を一乗の法として説く歴史上の仏——すなわちインドに生まれ、その生涯の間に悟りを開いた釈迦牟尼の説教という形式をとっています。後半は、第16章（如来寿量品）を中心として、釈迦牟尼としての仮の姿を捨てて、久遠の昔に成仏したという本地を明かした仏による説法の形をとっています。これから「一乗の法としての妙法」および「仏の永遠の生命」の二つは、法華経の基本概念であり、そのまま今日まで受け入れられてきました。

こうした、主題による基本的分割とは別に、経文が永い年月の間に編集を重ねられてきた経緯を考えてみましょう。法華経の成文化についての研究によれば、

「偈」と呼ばれる詩的な部分は紀元前1世紀頃までに成文化されたとされており、散文の部分はその後、おそらく西暦40〜50年頃までに成立したと考えられます。

ほとんどの章が散文と詩偈の組み合わせでできていますが、詩偈は記憶しやすいため、伝承の手段として用いられていました。偈の部分が最初に作られたはずだと考えられています。その後、詩の部分を敷衍ないし注釈する散文が書き加えられたのです。ただし、現在編纂されている経文では、前に出てくる散文の部分の内容を、後から詩偈が繰り返し返しています。

さらに、法華経の原型に、さまざまな「添加」がなされたと考えられています。何人かの学者は、それらの添加の後、サンスクリットの経文に7回の（文章・内容の）編集が行われたが、経文の原型自体は西暦2000年頃までに確定していたと考えているようです。こうした変遷を経ていたとしても、法華経は全体として非常に調和のとれた印象を与えるものになっています。



ルビオ教授（檀上左）の講演会に詰めかけたスペインの市民

集った会衆は「釈尊己心」の存在

法華経に述べられる出来事は、宇宙大の規模の世界で起こります。

前提となる世界観では、私たちが住む世界は、須弥山という巨大な山を中心とした四つの州からなると考えられていました。中心に位置するこの須弥山の南には、(聖書に説かれる)天のエルサレムのように、閻浮堤えんぶだいすなわち閻浮という大樹が豊かに生い茂る州があります。その地形は二等辺三角形を逆さまにしたかたちで、地表はガンジス河を含む四大河で潤されていました。つまり、北側が広く南に行くにしたがって狭くなり、南端がとがっているという、現在のインドを思わせる地形です。この州には16の大国、5百の中国、10万の小国がありました。これらの国々には悪業をもった人々が住むため幸せは少なく、だからこそ、これらの住民を救うため、この州を選んで仏が出現すると考えられています。

四州からなる我々の世界の外には、あらゆる方角に

無数の世界が存在し、それぞれの世界も四州からなり、それぞれ異なる仏が人々を導いています。我々の世界と同じく、これらすべての世界も、天文学的時間の「成住、壊、空」のサイクルに、永遠に支配されています。

ほとんどすべての経文のように、法華経も「如是我聞」の言葉で始まります。この言葉は伝統的に、釈尊の多くの説法の座に居合わせた阿難(阿難陀/アーナンダ)のものとされています。阿難は、釈迦牟尼が靈鷲山の頂で法華経を説いた様子を述べます。この冒頭の句の段階では、我々はまだ、ゴータマあるいは釈迦牟尼が紀元前5世紀に教えを説いた、インドのマガダ国の都・王舎城の郊外という歴史的現実の世界におります。

しかし、次の場面で阿難は、仏陀の言葉を聞くために参集した数限りなく多様な天界の衆生、人界の衆生、非人界の衆生に言及します。したがって我々は日常の現実世界を後にして、別の世界——同様に現実ではあるけれども、しかも日常を超えている世界——に入ったことに気づきます。

現代人は、理性と論理、そして現実の、忠実な、表現としての歴史という「現代の神話」にとつぷり浸かっています。ですから、読者がこの経を開いたときに注意しなければならぬ最初の関門がここにあるかもしれない。仏と菩薩たちの説法の舞台は、時間、空間、理論、理性を超えた、もちろん歴史も超えた、我々の通常の観念を完全に超越した世界に属しています。ガングス河の砂の数のような無数の衆生や世界について、また数えきれない劫の昔に起こった出来事について、繰り返し語られるのです。

一つの小劫——しばしば単に「劫」と表現されますが——これは1600万年を意味します。これらの天文学的な量や数字は実際のものではなく、読者——仏の説法では聴聞者——に、数えることもできない無量性というものを、しっかりと印象づけるための仮の数字なのです。文字通りに受け取るとは、これらがただの比喩にすぎないと考えるのと同様に、あまりにも単純な解釈です。これらは、あくまで現実です。ただし、この経文の中における壮大な現実／非現実なのです。

法華経はおとぎ話でもなければ、SF小説でもないのです。

在家の仏教団体・創価学会の戸田城聖第二代会長は、我々の日常的數量と経文上の數量との矛盾を、巧みな風刺によって、こう論じています。⁽¹⁾

「菩薩だけ集まっても八万人。声聞だけ一万二千集まるといつてもたいへんです。拡声器もなかった時代に何十万人の人を集めて釈尊が講義したと思われませんか。法華経の文上からみれば集まったことになっている。これはいへんな数です。何十万人の人を集めて講義したと。それならウソかと。ウソではない。ではほんとうに集まったのか。何十万人の人に拡声器もなく、いくら仏が大音声を出したからといって講義できましようか」

「八年間、それらの人たちが集まっていたというのです。八年間集まっていたら飯めをたくだけでもたいへんです。便所なんかどうしたと思いますか。ではウソかというのか。ウソではない。集まったともいえるし、集まらなかったともいえるのです」

「その何十万と集まったのは釈尊己心の声聞であり、釈尊己心の菩薩なのです。何千万いたってさしつかえない」

この経は、おとぎ話ではありません。一方、統計的データを示しているわけでもありません。ただ、心の枠をはずそうとし、理性の束縛を破り、従来の時空概念から知性を解放しようとしているのです。事実、「空」の領域になると、時空の概念については、我々の通常の概念や日常の規範は、まったく役に立ちません。このようにして読者は、概念の束縛という重荷から逃れ、自由を享受しつつ、法華経の教えを受け入れることでしよう。そうすれば、その教えは読者自身の存在の奥底にまで届くのです。

ところで、法華経の宇宙に誰も住んでいないわけはありません。経文のあちこちに綺羅星のごとく散りばめられた宇宙生成の概念によれば、この世界・閻浮堤に住む衆生は、すなわち我々であり、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天という「六道」の階層を輪廻しているのです。

法華経の主張① 「一仏乗の妙法」だけがある

さまざまな驚嘆すべき出来事が続いて、我々が観ている映画の宇宙的なスケールを思い知らされるわけですが、その後、仏陀は説法を始めます。

その中で際立つ最初のポイントは、成仏に至る乗り物はひとつしかない、すなわち**成仏への一乗の法だけがある**ということなのです。それまでは、仏陀は3つの道ないし乗り物、すなわち三乗の法（声聞乗、縁覚乗、菩薩乗）を教えていました。しかし今や、信仰者はこれらの劣る道を捨てて、成仏を求めるため、法華経の表現でいえば阿耨多羅三藐三菩提あのおくたらさんみやくさんぼだいに至るために、唯一の一乗の法だけを求めなければならぬとされるのです。なぜ、かつて三乗の教えを説いたのかと問われると、仏陀は答えます。信仰者たちはまだ、この至極の真実を理解する準備ができていなかったのだと。そのために、いわゆる**方便**を使って、徐々に高い解脱の道へと彼らを導いていくことが必要だったのです。

いくつかの大乘經典では、舍利弗など小乗を代表する仏陀の直弟子たちが厳しく弾呵^{だんか}（批判）されています。これに対して法華経では、彼ら全員への慈悲にあふれる言葉が説かれ、仏陀のその言葉を弟子たちが理解して、深い感謝で応える箇所があります。そして仏陀は、彼らが未来世に成仏するという記別を与え、彼らが衆生を化導する仏国土まで明かすのです。

法華経の教えは至高のものであり、菩薩たちだけがその奥義を理解しますが、それはエリートのためだけの教えではなく、一切衆生のための教えです。したがって、仏陀はさまざまな救いの手段（方便）を講じ、それらは七譬として表現されています。たとえば、有名な「三車火宅の譬え」（譬喩品第三）、ルカ伝15章の放蕩息子の寓話を思い起こさせる「長者窮子の譬え」（信解品第四）、雨は葉草や樹木を平等に潤すが、樹木はそれぞれの器によって違う受け取り方をするという「三草二木の譬え」（葉草喩品第五）、幻の城を出現させて旅人が歩み続けるよう励ます「化城宝処の譬え」（化城喩品第七）などです。さらに、第八章（五百弟子受記品）には、



法華七譬のひとつ「衣裏珠の譬え」（五百弟子受記品第八）の説明パネルの前で（本年2月17日、マドリード展で）

とくに内容豊かな譬えが語られます。「衣裏珠の譬え」です。施し物で生きていた一人の乞食が、長年の間、自分の衣服の裏に縫い込まれた「無価むげの（値段がつけられない）宝珠」を知らなかったという話です。この簡潔な物語は、あまたの幸福論よりもずっとよく真理を描き出しています。幸せになるための法則はどこにあるのでしょうか？ それは心の中に、一人ひとりの内面にあるではありませんか？——と。

救済のための一乗の妙法が全宇宙を貫いているという法華經の思想は、その重要性にふさわしく、後代に幾つもの展開を見せました。鳩摩羅什はこの概念を「諸法実相」と翻訳しました。これは「宇宙の実相」とも表現できるでしょう。この概念を基盤として、天台は「一念三千」の教義を体系化しました。「三千」とは一瞬一瞬の生命が示す種々相を指します。一念三千の教義は、小宇宙（一念）と大宇宙（三千）とは相互に依存しつつ、その奥底で一つであり、一乗の妙法と調和した総体をなしているというものです。一方、十界の曼荼羅は、地獄から仏界に至る十界または十法界に分か

れた宇宙に住む種々の衆生を图示していますが、もちろん一乗の妙法のもとに一体となっているのです。

近代の法華經信仰者であった日本の文学者・宮沢賢治（1896～1933年）は、その作品「農民芸術概論綱要」で、同じ思想を美しく表現しています。

「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう」と。

法華經の主張②—— 万人が成仏できる

法華經の第2の中心思想は**仏法のメッセージの普遍性**、すなわち仏界が万人に内在しているという主張です。第12章・提婆達多品では、仏陀は、悪逆の限りを尽くした——釈迦牟尼の命を奪おうとし、僧団の相和を破壊した——提婆達多であっても、前世で善根を積んだので、救われるのみならず、仏となることを明かします。この例は仏教の無限の慈悲を示すものです。法華經では善悪二元論を超えており、善と悪とは必ずしも排斥し合うものではないのです。

同じ提婆達多品には、法華經の普遍性と救済力とのさらなる証明があります。文殊菩薩は、海底にある龍宮（龍王の城）で法華經を説いていたときのことを語ります。龍（ナーガ）たちは、インドの神話によれば、人間でない衆生であり、仏法守護を担っていました。文殊菩薩は「あなたの説法を聞いた人々の中で、これまで、誰か成仏した人がありましたか？」と質問され、「ありました」と答えます。「それは、ようやく8歳になったばかりの少女でした」。この答えに、会衆は大変に驚きました。釈迦牟尼でさえ成仏するのに何劫もの間、修行したことを、皆が知っていたからです。しかしそのとき、啞然としている会衆の前に、一人の少女が進み出て、それが真実であることを行動で証明したのです。初期の仏教では、女性は五障がある（梵天・帝釈・魔王・転輪聖王・仏の5者になれない）という理由で、決して成仏できないとされていました。しかし法華經は、この主張を決定的に打ち破ります。この少女は人間ですらなく龍であり、女性であり、やっと8歳になったばかりでした。それにもかかわらず、文殊菩薩の説法を聴く

やいなや、靈的進歩の最高レベルに達したのです。これにおいて、この經の革命的教義が、性（男か女か）、年齢（子どもか大人か）、種（人間か人間でないか）、時間（即身成仏か歴劫修行か）などの差別をすべて超えて有効であることを重ねて示したのです。成仏の普遍性に関する、こうした驚嘆すべき開示は、法華經の中ほどの諸品にみられるわけですが、この經の2番目の重要思想です。

法華經の主張③——常住永遠の仏

法華經の後半では、同様に根本的に重要な3番目の思想、**仏の永遠の生命**を扱います。第16章「如来寿命量品」では、釈迦牟尼は永遠の昔に成仏していたことが明かされます。そして、インドに生誕し80歳で逝去する釈迦牟尼は、その永遠の仏が我々の世界に示現した応身仏であることを明かします。

仏陀の永遠性が説かれたことについては、3つの説明が可能です。ひとつは、多くの異なる仏を統一する必要があります。仏陀崇拜の歴史は、釈迦牟尼の信奉者たち

が、仏がこの世を去った後、仏の聖遺物を礼拝するだけにとどまらず、仏自身の存在を求めたことを示しています。ほどなく釈迦牟尼の代わりの仏たちが見出されました。こうして出現した異なる仏たちを法華経は統一しようとしてきました。それらの仏を、一人の永遠なる仏の示現として位置づけて、一体のものとしたのです。ふたつ目の説明として、この永遠の仏は統一的な真理に本有のものとされたのです。すなわち、一乗の妙法——宇宙の統一的真理は自然の法であるだけでなく、人格をもつ生きた永遠の実在でもあり、すべての衆生、すべての生命を貫いているということです。第3に、永遠の仏の脈動は、現実世界の活動を通して感得されるということとです。このことを歴史上の釈迦牟尼は、わざわざ説明しました。すなわち寿量品で、永遠の仏陀は終わりのない菩薩行を続けている（娑婆世界説法教化）と説明するのです。

こうした説明に対して、（現象面だけを見て）仏陀は時に涅槃に入り、時にこの世にまた出現するのではないかと反駁することもできるかもしれませんが。しかし、

こうしたことはすべて、仏が（入滅せず）いつも存在していれば、人間はそれに慣れて、成仏への求道を怠ってしまいうため、そうさせないためになされているのです。彼の身体的消滅は、人類が努力するよう仕向けるための「方便」でしかなく、多様な個人の能力と性質に応じて教えを示す慈悲の表れの一つなのです。このように、法華経において、それまで歴史上の人物であった仏は、時間と空間の枠を超えた存在となり、あらゆる場所に、そして一切衆生の中に存在する、真理と慈悲の永遠なる原理としてとらえられているのです。

「真理」「生命」「菩薩行」

伝統的な分析と経典テキストの歴史的成立過程への理解を基礎にすれば、法華経の主要な内容は3つの要素に凝縮することができます。法ないし教義（ダルマ）、完全なる存在（仏）、人間群（菩薩たち）。もっと簡潔に言えば、真理、生命、修行です。すなわち、宇宙の統一的真理（一乗の妙法）、永遠の生命（永遠の仏陀）および現実世界での人間の活動（菩薩行）が、この経の3大



于闐（うてん／ホータン）国王妃供養者像
（敦煌莫高窟98窟壁画から／敦煌研究院）

身である僧・日蓮は、この仏道修行の重要性を認識し、正義の戦いの旗印として法華経を掲げた最初の人物でした。悪に対する善の旗を掲げた日蓮の人生は、絶え間ない迫害に見舞われました。40代には伊豆へ、50代には佐渡へと流罪されましたが、耐え忍んだ苦難によって彼は菩薩行の真髓を体得し、経文に説かれる殉難の菩薩たちに自身をなぞらえました。そして、ついにこの経の無限の価値を認識したのです。

テーマなのです。それらは順に、法華経の説法の第1の場面（迹門の前靈鷲山会）、第2の場面（虚空会、11章から22章）、さまざまな菩薩の行が説かれる第3の場面（本門の後靈鷲山会）に対応しています。

最後の「修行（菩薩行）」においては、真実の教えを実践する必要があります、そして人生の苦難を耐え忍ぶ必要性を明示しています。たとえば、13世紀の日本のような政治的、思想的混乱が顕著な時代に、卑賤な階級の出

大乘仏教の骨髄でもあります。法の宝であるこれら3つが法華経に示されているのであり、これがこの2千年の間、すべての宗派の人々からこの経が尊崇され称揚されてきた理由であると言っても過言ではありません。法華経の随所に、これらの思想が、譬喩や寓話に秀でた優雅で説得力ある言語で表現されています。そのおかげで法華経は、アジアの文学と造形美術に、かくも多く取り上げられることになったのです。

西洋哲学のような組織的、論理的な解説を求めて、

法華經にアプローチするのは誤りであると言えましよう。伝統的仏教で最も重要とされる宗教的原則に関しても、その一部は、おぎなりに触れられるだけであり、それ以外の概念も、順序よく秩序立てて表現されているとは言いがたく、前後の脈絡と無関係に、天啓のひらめきのごとく突如現れます。

法華經の文は、その天文学的数字、大げさな表現、決まり文句が詰まった文章、呪文の効果を用いて、私たちの知性以上に感情に訴えるものになっています。すでに述べましたように、仏教の初期には、教えを書き残すのではなく記憶に頼り、教えを授けるのにふさわしい人だけに口頭で伝える習慣でした。決まり文句を用いた様式も、詩文による要約も、あちこちに見られる繰り返しも、すべて記憶と口承を容易にするためのものでした。

この經の最も重要な思想で、おそらく在家の人々に信仰されてきた理由となっているのは、全宇宙の隠された真理を法華經こそが体現しているのだと繰り返し断言していることです。自身に対しこれほどたゆまず

熱心に、これほど多くの賞賛を与えている書物は少ない。これが法華經のもう一つの驚くべき側面であり、隠された価値の一つです。章が進むにつれ、法華經の卓越性についての自己賛美が増えてゆき、登場人物の語る言葉の魔術にやすやすと包み込まれ、彼らと同様、序品で約束された説教がいつまでも説かれないうという驚くべき事実に気づかなくなります。いくつかの箇所では、これから法華經が説かれるであろうと言います。他の箇所では、すでに素晴らしく説かれたと言います。その他の箇所では、どのように説かれるべきか、どのように法華經を尊崇すべきかを言います。仏教学者ジョージ・タナベは、法華經は「教説が決して説かれな⁽²⁾い、長い序文のある、書物本体のない」經文であるとさえ書いています。

言ってみれば、法華經への一連の素晴らしい賛嘆が、法華經自体になるのです。このとらえどころのない性格はおそらく、大乘仏教が常に強調してきた「究極の真理は決して言葉では表せない。言葉は、空の統一性（一切の現象が相依相資の関係にあり、分断できない一如の存

在であること)を破って、なんらかの区別・分別をしようからだ」という考えによるものでしょう。したがって、法華經にできることは、真理の外輪をなぞることだけであり、それはあたかも、まばゆい光を放つ空虚な中心を目指しつつ、ランプの周りを飛び回る蝶のようです。それは、しだいに広がりつつ、無量の意味を秘めた大海に流れ込む河なのです。それは、壮麗な額縁のついた絵画ですが、水平に広がるカンヴァスには何も描かれておらず、見る人を驚かせるのです。法華經は、多くの經典と同様、さまざまな解釈が可能です。しかし、その中心は「空」であり、空いているのです。それは、幹が中空でありながら枝葉が茂り果実が成る樹木のようにあり、果実の種子は発芽するために人々の心に播かれるのです。

この經は、その名を冠した華の性質にふさわしいといえます。実際、ハス(学名 *Neimbo nucifera* : ネルンボ・ヌシフェラ)は、スイレン(睡蓮)と違って、茎と地下茎(蓮根)が中空になっている植物です。⁽³⁾この經文は、このように中空で遠まわしの經典であり、テキストは

純粋な前後関係だけからなり、横へ横へと広がるばかりで(その奥底に潜むものに触れないので、我々は、言葉を解釈するだけでなく、何も語られていない部分をどうしても埋めたいと思うようになるのです。

端的に言えば、民衆に開かれた經典であり、他の聖典よりも論じやすく解釈しやすいのであり、実際そうされてきたのです。そればかりか、民衆の心や生命の中で変容され、精妙に浸透してきたのです。まるで、シルクのドレスに浸み込む香水のように。

「宇宙的ヒューマニズム」

前段で述べた法華經の広大でつかみどころがなく、それでいて開放的な特質は、宗教という次元から見ると、真実へ至る道は言葉や知的教説だけではないことを私たちに教えています。經文の中では、信仰と修行によって仏の智慧に近づくことを強く勧めており、心の両方で經文を体験し、法華經の真義を会得するよう、うながしています。東アジアの宗教と文化に法華經が大きな影響を及ぼした理由は、祈禱書としての重



「法華経——平和と共生のメッセージ」展。西夏語訳法華経のパネル説明を読む来場者（本年2月17日、マドリッド展で）

要性にあるという以上に、部分観の教えを総合したことで、そして人間精神の灯台となったことにあります。

おそらく、このヒューマニズムの価値こそが、現代社会にとって最も意義深いものでしょう。この価値に込められた法華経の智慧は、百パーセント人間中心の智慧であり、現代にも完全に通用する智慧です。創価学会インタナショナルの池田大作会長は、間違いなく現代の世界で活躍する最も聡明な法華経の智慧の守護者ですが、法華経による**宇宙的ヒューマニズム**を提唱しています。会長はこう述べています。

（法華経には）三世を自在に遊戯する歓喜の合唱がある。自由の飛翔がある。燦々たる光があり、花があり、緑があり、音楽があり、絵画があり、映画がある。最高の心理学があり、人生学があり、幸福学があり、平和学がある。「健康」の根本の軌道がある。「心が変われば一切が変わる」という宇宙的真理に目ざめさせてくれる。個人主義の「荒れ地」でもなければ、全体主義の「牢獄」でもない——人々が補い合い、

励まし合って生きる、慈悲の浄土を現出させる力がある。共産主義も資本主義も、人間を手段にしてきたが、人間が目的となり、人間が主役となり、人間が王者となる——根本の人間主義が「経の王」法華経にはある。こういう法華経の主張を、仮に「宇宙的人間主義」「宇宙的ヒューマニズム」と呼んではどうだろうか。⁽⁴⁾

仏教信者の修行に最も影響している章は、おそらく経の終わりのほうの何章かです。ここには、信者を助けようと熱望するさまざまな菩薩が描かれています。不軽菩薩が登場する常不軽菩薩品第二十は、「許すこと」の意味を教えるのに重要な章です。第二十五章には、中国や日本で観音とか観世音として知られる観世音菩薩が登場します。観世音には「観 観る」「世(世界)」「音(音)」の三つの漢字が組み合わされています。この名前のおと、観世音菩薩は、王や君主から商人や罪人といったるまで、万人の苦しみを和らげるために、必要な姿になることができ、この章・観世音菩薩普門品では

33もの姿をとると説かれています。助けを求める人に応じて、ふさわしい姿を現じるのです。観世音菩薩の聖像は、苦悩にあえぐ人の叫びを聴き観るために多数の耳と眼をもつ姿や、多くの願望に応えるために多数の手を持つている姿で表されています。日本でキリスト教が禁止されていた時代、キリシタンたちは、聖母マリアの像の代わりに観音の小像を礼拝しました。「マリア観音」と呼ばれた慈母観音の像です。

この観音品をはじめ法華経の各章は、長年の間、数かぎりない信者たちに熱心に読誦されてきました。こうして法華経は、社会のあらゆる階層の人々に癒しと希望を広げてきたのです。

文化への圧倒的影響

文化的にも、法華経の価値は計り知れません。中国、韓半島、日本におけるここ1500年の文化史において、法華経が直接的または間接的にテーマや場面を提示している例は圧倒的な数です。彫刻、絵画、書、建築、演劇、造形美術。そうした分野で、法華経のモチーフは、



「法華経展」は日本の関西でも開催された（本年8～11月）。記念講演は中国敦煌研究院の樊錦詩院長が「敦煌壁画に見る東西貿易と文化交流」と題して（8月23日、神戸市・関西国際文化センター）

しばしば教訓的に、そして、より豊かにふくらませて使われました。文学に関しては、法華経を完全に理解せずにこの三国の多くの詩歌を理解することはできませんし、それを示す例は枚挙にいとまがありません。

平安時代（8～12世紀）と呼ばれる日本の古典芸術の時代には、上層階級の人たちは法華経を高く評価し、この経についてきわめて高度な知識をもっていました。平安時代および次の時代（12～14世紀）の120以上の詩華集（アンソロジー）から選んだ法華経関連の和歌を1360首以上も集録した作品があります。⁽⁵⁾ 法華経についての詩歌の最初は、僧・行基（668～749年）のものだとされてきた次の歌です。

法華経を 我が得しことは

薪たぎこり 菜なつみ水くみ つかへてぞ得し

この歌は、提婆達多品第十二の説話に着想を得たものです。仏陀が過去世で予言者（阿私仙人／提婆達多の過去世）に仕え、薪を拾い、水をくみ、菜を集めるなどして供養して、法華経を学んだという話です。

世俗文学の例では、平安時代の古典『枕草子』が挙げられます。この作品で、作者である清少納言は、ある日、説法（法華八講）の途中で帰宅しようとして、乗

り物を持つてくるように命じます。すると、ある貴族が彼女に「席を立った五千人のような振舞いではないかね」と語りかけています（第四十二段）。これは明らかに、（方便品第二で）釈尊が説法しようとするのと五千の上慢の男女が、聞くにおよばないと席を立ち、退座したことをふまえているわけです。このように、法華經の挿話は人々の生活に深く浸透し、少なくとも当時の上層階級の人々は日常的にそれを口にしていたのです。

中国と日本の最大の物語作品は、それぞれ『紅樓夢』と『源氏物語』です。両作品には法華經の概念やイメージが深く取り込まれています。法華經は、その多くの場面が両国の宗教芸術で最もよく使われた經典です。

何十世紀にもわたる継承の流れの中で、人々にとつて法華經とは、聖典であり、精選された説法であり、寓話集であり、目に見える画像・仏像でした。これら經文と説法と寓話とイメージとが、さまざまな国の、さまざまな時代に、それぞれの生活環境に生きる、血と肉をもった人間に対して、驚くほど雄弁に語り続けできたのです。そして、現代人に対しても語りかけ続

けているのです。こうした理由から、法華經は、人間と万物にとつて最も壮大で崇高な価値をもつもののひとつと言えます。

水のごとく変化し

水のごとく全てを潤す

法華經のもつ格別の特徴とは、どの箇所においても、登場人物たちが、決して語られることのない説法を賞賛し続けているところにあります。この賢明にして、つかみどころのない開かれた性質によって、法華經は、異なつた多様な目的に応じて読むことができ、聴くこと、語ること、論じることができ、加工し、応用することができなのです。何も書かれていないにもかかわらず、効能と価値にあふれた本なのです。水のように、いかようにも形を変え、水のように、すべてに浸みわたり、水のように、触れるものすべてを——なかならず人の心を——みずみずしく蘇らせます。

法華經の偉大さを垣間見るとき、言葉は何と役に立たないことでしょうか！ 何も語らないほうがよいの

ではないかとさえ思われるほどです。

教えと信仰、法義と儀式、歴史とミステリー、思想と権力、教授法と美学……長く、そして魅惑に満ちた法華経の歴史の中で、さまざまなものが交錯してきました。

紀元406年の鳩摩羅什の漢訳にある法華経の「六万九千三百八十四」の文字たち。それらは本日、マドリッドのこの会場で、我々全員の前に置かれています。二月の寒い午後です。日本では梅の花が咲いて、不安たえない世の人々の心を希望で満たす季節です。これらの文字は精神的メッセージを放っています。今を生きるすべての男女の心の中に、我々みな心の真つ直ぐに入ってくる、それは今なお生きている現代的メッセージなのです。

注

- (1) 池田SGI会長が引用。聖教新聞社刊『法華経の智慧』第一巻、序品①
- (2) ジョージ・J・タナベ編『日本文化の中の法華経』序文

から。George J. Tanabe (ed.), *The Lotus Sutra in Japanese Culture*, University of Hawaii Press, 1989

(3) 『法華経の智慧』第三巻、從地涌出品②

(4) 『法華経の智慧』第一巻、「哲学不在の時代」を超えて

(5) 島地大等編『漢和对照妙法蓮華経』巻末の「法華歌集」を指す。前掲『日本文化の中の法華経』16〜17頁を参

照。“The Meaning of the Formation and Structure of the Lotus Sutra” by Shoini Ryodo

(Carlos Rubio / マドリッド・コンプルテンセ大学教授)